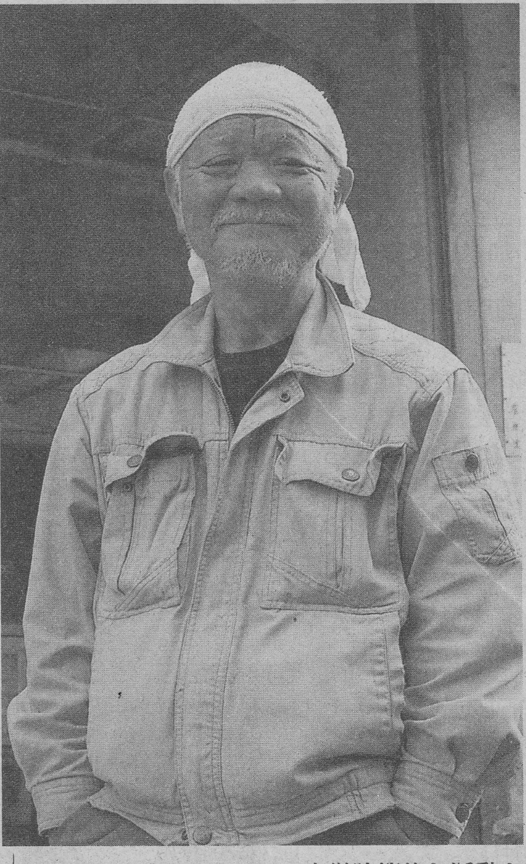
なにわびと

不利な人の側へ 決然と

釜ケ崎日雇労働組合 副委員長
三浦　俊一さん（70）



みうら・しゅんいち　大学除籍後も活動を続けていたが、1985年に政治組織を離れた。対独レジスタンスやアルジェリア独立戦争の歴史を知りたくてフランスにわたり、同時に日仏間の貿易会社を設立した。2007年に会社を整理し、釜ケ崎に腰を据えた。

市民運動の現場でよく見る顔だ。

沖縄から米軍基地をなくせという集会、日本軍「慰安婦」問題の解決を訴える街頭行動、ヘイトスピーチ対抗と幅ひろく、日雇い労働者の一群をひきいてデモにくわわる。

本業は釜ケ崎日雇労働組合の副委員長。就労相談や生活改善を手がけつつ、学生対象の釜ケ崎フィールドワークに年間100~150人受け入れている。ほかに、貧困家庭の学習支援、母子家庭の支援も。不利な立場の人の側に決然と立つ。

東京出身。1960年代の学生運動に身を投じ、全共闘議長もやった。しかし過激な行動は民衆の支持を失う。「停滞を乗りこえようと、もっと前に、もっと過激にと動いた。まるでピエロだった」

一線から身をひき、貿易会社を興した。60歳を機に、日雇い労働者支援をしている知人に誘われて釜ケ崎に来た。

ホームレスの自立支援相談員から始めた。朝から晩まで肩をならべて草刈りやごみ拾いをしながら、「ふるさとの段々畑はミカンがきれいでなあ」「夕方、おやじが帰ってくる足音がすると、げたを持って逃げたんだよ」といった彼らのつぶやきを聴きつづけた。

この3年間が「おまえは決定的に間違っていたのだ」と突きつけてきた。あのころ、「労働者の解放」を叫んでいた。ホームレスの知人はひとりもいなかった。釜ケ崎にいるような、使い捨てられて、したたかで、やさしくて、ずるくて、涙もろい本物の労働者は見えていなかった。「おれたちは『人間の解放』を言いながら、人間を軽んじていた」

わけのわからない政治用語と決別し、「教えない。いっしょに考える」という今の立場にたどりついた。

月1回、沖縄・辺野古に行く。米軍基地の建設現場に朝いちで座り、機動隊に排除される。ともにごぼう抜きにされたおじいやおばあにはニワトリやヤギへの餌やり、朝の畑仕事があるから、彼らの送迎役も担う。「みんな日々のたつきの合間に辺野古に通っているんだよ」

釜ケ崎に学びにくる学生には、「君たちの革命をしてくれ。僕たちの『革命』のまねをするなよ」と声をかける。

（下地毅）